

「卒業式を終えて」

三年七組担任 神谷 雅徳

「with コロナ」この子達の高校生活を総括するにはこれ以上ない言葉であると思います。

花形行事に数えられる、文化祭や体育祭、修学旅行が次々と中止となり落胆の色を隠せない生徒の姿を幾度となく目にしてきました。「人の命には変えられない。」抗うことが許されない正義の言葉を前に、ただそこに立ち尽くすことしかできないあの子たちは、どれだけのストレスを抱え、我慢を強いられてきたのでしょうか。このどうにもならない憤りの矛先がどこに向かうのかを私は非常に不安視していました。「不登校」「友人との軋轢」「暴力行為」。新型コロナウイルスによる混沌とした世界の色にすっかり染められた私の思考は、過剰なほど悲観的で、生徒が道を踏みがないよう、つきつい物言いをしてしまった記憶があります。しかし、それは完全なる杞憂でした。あの子たちは、強くたくましく立派に成長してくれました。コロナにより生じた余剰の時間は、学習と部活動に充てられ、様々な力を伸ばさせてくれました。あまりにも不幸な境遇から周囲から憂いを帯びた目で見られることも少なくなかった生徒たちですが、辛い時間を共有し、乗り越えてきたからこそ、忍耐力のある絆の強い集団になったのだと理解しています。沖縄の広大な海を背景に撮るはずだった写真はなくなり、私の手元に残った写真に収まるあの子たちのほとんどが学校内で制服姿。かけがえのない高校生活がいかに緊急事態宣言措置に冒されたのかを物語っていました。しかし、その写真たちを見ると「くすっ」と思わず笑みがこぼれてしまいます。写真の中で咲き誇る百点満点の笑顔。「先生、私たちは楽しかったよ」と私に語りかけてくれているようでした。そんな生徒たちの姿から、「何気ない日常」がどれだけ幸せなことであるかを教えてもらった気がします。

「コロナだから」の悲観的な一言で集約してきた高校入学当初とは比較にならないほど、二・三年生になってからの時間は充実していました。私自身も様々な制限下の中でもできる年中行事を生徒たちとともに作り上げる時間が何よりも至福の時間となりました。

さて、そんな高校生活の結びとして訪れたあの子たちの門出となる卒業式。コロナと共に歩み続けたあの子たちの顔は、下なんか向い

ていません。自らの将来を見据えるような強いまなざしで立派に入場していきました。様々な感情が込められた大濱君の答辞で思わず涙。会場内は、あの子たちの苦楽を最も近くで見守っていただいた保護者の方のすすり泣く声で包まれました。心身ともに非常に健康を保ちにくいコロナ禍で生徒たちに寄り添い続け、毎日学校へ送り出してくださいました保護者の方々には感謝しかございません。いよいよ退場の時。あの扉を出ると、あの子たちとお別れだと思うと、「いやだな。まだ卒業してほしくないな。」あまりにも子供じみた感情に襲われましたが、それはあの子たちと過ごした日々が、私にとってもかけがえのない時間であったことの証明にもなると思います。新型コロナウイルスが日常に存在することを前提とした、一種の新しい高校生活を駆け抜けたあの子たちの背中が大きく、たくましく、かっこよく見えました。今後めまぐるしく変化していくであろう日本の未来にも、様々な困難に立ち向かってきたあの子たちであれば、十分適応できると思います。

結びとなりますが、「with コロナ」と言われたこの激動の日々の中で、私を支えてくださいました、先生方、保護者の皆様、そして生徒のみんな本当にありがとうございました。何年経っても色あせることなく輝き続ける多くの思い出をいただきました。今後も立派で情熱的で生徒に目標とされるような「先生」となれるよう精進してまいります。四九期のみんな、卒業おめでとう。そして、心からのありがとう。